

した胚や発芽後の発達を詳しく記述している。山崎先生は *Souèges* に私淑され、筆者は *Guttenberg* に私淑して仕事を進めることになった。

#### 4. 植生調査、生態学

山崎先生は、筆者が弟子となる以前の若い時代に、各地での植生調査や生態学に関するいろいろな仕事をされた。これは推測だが、先生は植物の環境への適応と進化について深く考えられたのであろう。進化の単位として個体を考えるのは無意味であり、自然界における種集団 (Population) を考えるべきは当然である。しかしおそらくそれだけでも不十分で、多数の種類から構成される共同体である群落 (Community) を、適応、進化の究極の単位と考えられたのではないか。他に注目すべき意欲的な仕事として、ササ類の葉の浸透圧を測定されたことがある。ササ類の分類は大変に難しいので、根本的に改変しなければならない。そのため、異なる環境に対する適応を、浸透圧の年変化という生理生態学的性質によって示そうと考えられたのであろう。

筆者が弟子となった時には、先生はもう生態学の仕事は止められていて、研究室で話題に出ることもなかった。ところが数年後に森

田竜義氏が新たに弟子となった時、彼がセミナーなどで出す話題は生態学に関することばかりであった。筆者が熱中していた形態学や発生学には彼は全く興味を持っていなかった。つまり森田氏と筆者は、山崎先生を全く違う別々の側面から見ていたのである。これはまことに新鮮な驚きであった。森田氏はきわめて友好的な性格であったので、考えが違っていても互いに反目するようなことは全くなかった。むしろ互いの足らざる点を補い合えるのではないかと考えた。この分野について筆者がこれ以上書き続ければ不正確となるばかりである。それは森田氏の役目であろう。

世間的に見るならば、山崎先生は大学において不遇であったと言えるであろう。教授になられたのは定年退職の直前であった。しかし先生の心の内を思えば、これはかえって幸福だったのでないか。大学の中で偉くなって、管理運営や会議に忙殺されるなどは、先生の意思とは正反対のことである。我々弟子としても、そのように俗物化した先生など想像することもできない。常に全身全霊をあげて植物学の研究に没頭されていた師であるからこそ、我々は山崎先生を無上の誇りとするのである。

#### 金井弘夫：山崎 敬さんの思い出

Hiroo KANAI: In Memory of Dr. Takasi Yamazaki

2007年2月2日、急性心筋梗塞のため亡くなられた。ずい分以前からペースメーカーを装着し、身体障害者一級のパスを持っておられたが、あるとき西武秩父線に一人で乗っているのに偶然お遭いした。「武甲山の麓の植物園を見に行く」と言っておられた。「これがあるとどこでも行ける」と、パスを見せてくれた。

私が植物学教室に入ったとき、山崎さんは助手になったばかりだった。東大植物学教室は全員で構成される「教室会議」で運営され、学生までが人事の一票を持っていた。当然のことに会議は頻繁に開かれ、議論は錯綜した。一方全学の職員組合も活発で、公務員のゼネ

ストなどが計画された時代である。山崎さんはこのどちらにおいても、細胞学の佐藤七郎氏と共に有力な論客だった。私のような日和見のノンポリでも正論かつ穏当と思われることを堂々と主張した。しかし最後は投票なので、多勢に無勢という局面も少なくなかったが.... 後年の彼の無口ぶりからは想像できない。ところが研究室では、そういう議論を聞かされたことはなかった。「普通の新聞には出ていないことが書いてある」とアカハタを講読していたが、自分の主義主張を他人にまで感染させようとするそぶりは全く見せなかった。分子生物学や実験分類学が導入され始めた頃で、「どちらが本質的か」という議

論をしたがる若手に、いろんなレベルにおける研究の必要性を穏やかに主張していた。

山崎さんの業績で、是非とも記憶にとどめてほしいことは、ハーバリウムマウンターの定員化である。当時は高度経済成長のただ中で、臨時職員（いわゆる常勤的非常勤）を数年間自分の部局の経費で雇い続けると、定員化できる制度があるということ、山崎さんは聞き出してきて、彼は本田正次教授を説得して、分類研究室の予算をこれに振り向け、続けざまに二人のマウンターを定員化した。植物学教室の研究費の配分は研究室制度を採用しており、講座に配分された予算を御破算にして研究室に配分し直していたのである。だからこの二人の定員化までの5、6年は、分類研究室の研究費は、教授を含めてたいへん厳しいものだった。たとえば標本室の殺虫は外注するわけにゆかず、窓をグリースで密閉したうえ、片手で標本棚の扉を開きながら如露でクロルピクリンを後ずさりしながら撤き、如露を放り出して逃げ出してから入口のドアを閉めてグリースを塗るといふ、決死の覚悟を要した。開放するときには、屋上から一箇所だけロックしてない窓につないであるロープを引いて窓を開け、あらかじめセットしてあった手製の大扇風機でガスを排出してから、おそろおそろドアを開けて入室した。当分の間はハーバリウムに入るとポロポロ涙が出たし、うっかり標本棚の扉を開けたら、溜まっていたガスに襲われて逃げ出すこともあった。ハーバリウムの窓やドアの縁は、グリースがきれいにとれず、いつもベタついていた。これも山崎さんと後述の松田氏の開発した手法である。

わが国の公的ハーバリウムで、マウンターが定員化されたのはこの事例だけだろう。ところが1970年代に教室の組織変えて分類研が植物園へ移ることになったとき、「定削対象者数のバランスが悪くなる」という理由で、分類研はこのマウンターをはじめ3名の研究補助員のすべてを、他の研究室に配置換えされて失ってしまった。ハーバリウムの仕事が教室内部でさえ理解されず、ここでも多勢に

無勢だった。ご自分が苦勞して勝ち取った定員のマウンターが、単なる雑役としてよその研究室に山分けされるのを見なければならなかった山崎さんは、さぞぐやしい思いをしたことだろう。

私が分類研究室に入った頃、山岳部出身の山崎さんは南アルプスのフロラ調査に熱を入れていて、生化学研究室にいたクライマーの松田弘明氏と組んで、年に何度も山へ入っていた。当時はまだ山小屋は整備されておらず、バスも奥地まで入らず、テントと全期間の食料を背負って歩かねばならなかった。原寛先生がヒマラヤ調査を企画したとき、全く知らない土地へ調査に行くことについての装備計画に大いに役立ったのは、この二人の経験と知識だった。

山崎さんの植物学上の業績としては、ゴマノハグサ科の分類が第一に挙げられるが、とくに胚発生の面から系統関係を追求した点がユニークである。発生途上の胚の連続切片を作って断面を合成し、生育過程を解釈するという、おそろしく辛抱強い仕事である。胚発生の研究はその後もたくさんの分類群について手を広げ、その知見が現代生物学大系（中山書店）に生かされている。もう一つの仕事としては、生態系の調査が挙げられる。1950年中頃、内地留学した宇都宮大学の薄井宏氏に触発されて、植生調査を行うようになり、いくつかの植生タイプを発表している。しかしその後のドイツ流の植物社会学的調査の隆盛によって、今では忘れ去られてしまった。小石川植物園で出会って結婚した富佐子夫人とは、自宅でたくさんの植物を栽培しながら観察を続け、その結果がツツジ属のレビジョンとして刊行されている。

東大のハーバリウムが本郷と小石川に分割されてからは、定年後も専ら小石川に通って、未整理標本の配架を一人黙々と続けておられた。地味な分類学の中でも最も地味なハーバリウムの維持に、人知れず力を注いでいた山崎さんだった。ご夫妻の意思で葬儀は行われなかった。